

ワールドユースデーの体験

サカモト・ジョアン

私の名前はサカモト・ジョアンです。ポルトガルで開催されたワールドユースデーに参加した若者の一人です。私はブラジル人で、18歳です。両親なしで旅行するのは初めてだったので、最初は怖かったし、日本語もあまり話せなかったのも、なおさらでした。でも、同年代の若者たちと一緒に時間を過ごし、彼らの話を知り、自分の話を分かち合い、若者たちだけでなく神父さんたちとも新しい友情を築き、彼らの人生の話を知り、彼らのコミュニティがどのようなものなのか、特に教会以外の自由な環境で彼らがどのような人たちなのかを知ることができたのは信じられないような経験でした。私たちは楽しみ、話し、文化が全く異なる他国のカトリック教会がどのようなものなのかを知ることができました。

グループBの仲間のおかげで、私は大切な存在であり、とても歓迎されていると感じました。なぜなら、私は日本語をあまり知らないため、いつも隅にいることが多かったのですが、この旅ではポルトガル語を話せたので、英語を話すよりもずっと早く伝統を作ることができ、移動の仕方を聞いたり観光地を探したりすることができました。だから、見たことも知らない外国人の私を信頼してくれて、仲間として迎えてくれたんだと思います。他の国籍の人たちからは、「彼は日本人じゃないのか」と聞かれました。彼らは「彼はブラジル人だけど、僕らと一緒にだし、日本のグループだから同じだよ。」と答えてくれました。他の国籍の人たちは、日本にブラジル人がいて、私が自分の話をし、彼らの話も聞けることに面白さを感じてくれました。私にとってもっとも信じられないことは、彼らが私を彼らの一員のように扱ってくれたこと、でした。彼らのおかげで、私は日本人について違う見方をすることが出来ました。

そして、私にとって最も幸せだったのは、ローマ教皇のミサの日でした。世界中の若い人たちが一堂に会し、日本のことや日本のカトリック教会がどのようなものなのか、私たちに話しかけてきたり、尋ねてきたりするのを目の当たりにして、私たちは心が温かくなり、幸せな気持ちになりました。

この旅で一番好きだった時間は、リスボンに滞在した1週間でした。なぜなら、そこは私達がお互いから最も多くを学び、最も多く歩いて、教会や大聖堂、美術館など、いろいろな場所を知ることができた場所だったからです。信じられないほど素晴らしかったです。そして最も悲しかったのは帰ってきた日です。さよならを言いましたが、今でも連絡を取り合っています。もし行かなかったら、とても後悔していたでしょう。

今、私は共同体の若者たちを指導して、私の経験をすべて伝え、2027年に韓国で開催されるワールドユースデーに行くよう、彼らのモチベーションを高めようと思っています。そして、次回はさらに多くの若者が日本から参加できるようになるでしょう。これは彼らに

とってとても重要な素晴らしい経験になると思います。私を選んでくださり、このような素晴らしい経験をさせてくださった京都教区に感謝します。本当にありがとうございました。

(原文 ポルトガル語)